

## 『トロッコ』を読む

——〈断續してゐる世界に佇むこと〉——

池 上 貴 子

### はじめに

『トロッコ』は、大正十一年三月一日発行の雑誌「大観」に掲載された。龍井孝作の証言によれば、当時芥川と交流があり〈澄江堂連中の一人〉であつた力石平藏から〈貰受けた五六枚の原稿〉を〈書改めた〉ものだという。<sup>①</sup>

作品の時代背景は〈小田原熱海間に、軽便鉄道敷設の工事〉が始まつた頃。八歳の少年、良平はトロッコに憧れ、工事現場に日参する。一度だけ、土工のいない隙に子ども達だけでトロッコに乗り込み、怒鳴られ逃げ出すなどするが、ある日、二人の若い土工の許可を得て念願のトロッコを押す手伝いを許される。三人はトロッコを押し、時に乗り込みながら峠を越えていくが、道半ばの夕闇迫る中、良平は突然土工に帰るよう告げられる。〈薄暗い〉路を独り、必死の思いで走り帰ることとなつた少年の日の思い出を、東京に出て妻子をもつた今も良平は時折思い出す、という内

容である。

従来の『トロッコ』論では、視点人物である良平の物語に主眼をおいており、最も主要な読みとしては田近洵一の説である少年の「初めての他者経験」、すなわち自我と他者性の問題が挙げられよう。<sup>②</sup> 他にも、近代化に巻き込まれた都市労働者の内向性に着目した高橋龍夫の、良平をめぐる「故郷喪失」者ゆえの「故郷回想」という対比構造の指摘もある。<sup>③</sup> 特に国語教育分野では、主人公の心理を重視する傾向があり、岡崎晃一は「場面転換とそれに伴う主人公（良平）の心理の反映とを一セットにする構成法」が「良平の心理を印象的に描写」していると評価している。<sup>④</sup> しかし、かつてF・シュタンツェルが、作品の分析において、「作中人物の知覚と体験」の「媒介者」である〈局外の語り手〉と、〈作者という人格〉とを〈峻別〉していたように、またジェラルド・ジュネットが、「誰かが何事かを語るることによって成立する出来事」としての〈物語〉に着目し、「語るという行為それ



ーフは、やがて晩年の「齒車」(昭二・六)における「僕」の孤独へとたどり着く。

芥川が問い続けてきたこの〈世界にひとり佇む者〉というモチーフの片鱗を『トロッコ』に見るならば、そこに視点人物良平の佇む〈世界〉を別の地平から語ろうとする語り手の存在が見えてくるだろう。『トロッコ』の世界を、かつて下沢勝井は「行きはよいよい 帰りはこわい」のような「大変運命的で、一面定式的な結構が示している構成の手法」だと述べた。<sup>⑧</sup>しかし、『トロッコ』は、〈行って〉〈帰る〉という往還の〈物語〉なのか。語り手はその〈物語〉を一方で踏まえながら、良平のへたつた一人〈佇む〉世界を、その語りのうちに周到に展開しようとしてまいいか。<sup>⑨</sup>以上の点に着目し、まずは『トロッコ』の語りと良平少年の視点の差異についてアプローチしてみたい。

### 一 『トロッコ』をめぐる二つの領域

先述したように、『トロッコ』の冒頭において、作品の時代設定は小田原熱海間に軽便鉄道敷設工事が始まった年と、読者に明らかにされている。

小田原熱海間に、軽便鐵道敷設の工事が始まったのは、良平の八つの年だった。

興味深いのは、良平が「八つの年だった」とここで宣言されていることである。時代設定と少年の年を並置することで、必然的

に作品には二つの領域が発生しているよう。

一つは、語り手の領域である。「八つの年だった」と語りうる存在、すなわち少年時代を回想する現在の良平の領域といえよう。浅井清はこの作品を、「少年の日の思い出の一齣が額ぶちにはめられているのではなく、思い出の一齣への回帰が絶えず現実を逆照射している可逆性の上に、成り立っている」と鋭く指摘した。<sup>⑩</sup>だが、さらに言えば「現在の良平」さえも語り手に再構築された「語られる存在」、すなわち相対化された存在ではないか。この語り手によって相対化された「現在の良平」という視点は、作品を読み進めていくうえで重要と思われる。

もう一つは、少年の眼の領域である。大人が展開しようとする時代背景や制度を無化してしまう少年の絶対領域ともいえる。たとえば「軽便鐵道敷設の工事」についていえば、西洋と肩を並べんとした国家の一大インフラ事業であったがゆえに、政治的・歴史的関心の高い「大観」読者が、少なからぬ共通認識を有していた点は疑いえないだろう。<sup>⑪</sup>だが、「八つの年」の良平が工事現場へ通う動機は、以下のように極めて単純なものであった。

良平は毎日村外れのへ、その工事を見物に行つた。工事を

——といつた所が、唯トロッコで土を運搬する——それが面白さに見に行つたのである。

語り手は冒頭において、良平少年が執着しているのは「唯トロッコで土を運搬する」という運動であり、〈トロッコ〉そのもの

だと告げているのである。そこに、「トロツコといふ物象にまつる記憶を描」き、「人生の象徴」へ引き上げたという三島由紀夫の評価を想起することもできよう。肝心なのは〈物象〉という言葉であり、その言語選択をした三島の感性の鋭さである。あえて〈物象〉という表現を選ぶことで、作品が〈物象〉をめぐる〈記憶〉、すなわち良平少年の〈物語〉に集約されていることを見抜いていたのではないか。実際、語り手は、軽便鉄道敷設工事にまつわる歴史的・文化的・政治的なコードの読み取りを、〈物象〉にただ引き寄せられる八歳の少年の眼を通して語ることで無化するのである。さらに、語り手の語りを受け取る読み手が、この子どもの視点に接続することで、「大観」（現実の）読者層が期待する良平の物語とは別の物語を受け取ることになる。

たとえば、山から下りてくるトロツコやそれに携わる土工の動作について、語り手は簡潔な短文の文脈に終始しており、その背景に本来あるはずの作業の目的（意味）を読み取らせない。

トロツコの上には土工が二人、土を積んだ後に佇んでゐる。

(A)

トロツコは山を下るのだから、人手を借りずに走つて来る。

(A)

煽るやうに車臺が動いたり、土工の半天の裾がひらついたり、細い線路がしなつたり (A)

——良平はそんなけしきを眺めながら、土工になりたいと思

つた事がある。(B)

せめては一度でも土工と一しよに、トロツコへ乗りたいと思ふ事もある。(B)

トロツコは村外れの平地へ来ると、自然と其處に止まつてしまふ。(A)

と同時に土工たちは、身軽にトロツコを飛び降りるが早いか、その線路の終点へ車の土をぶちまける。(A)

それから今度はトロツコを押し々々、もと来た山の方へ登り始める。(A)

良平はその時乗れないまでも、押すことさへ出来たらと思ふのである。(B)

むしろ、ここで語られているのは、トロツコや土工の存在や〈物象〉としての運動そのもの (A) と、トロツコに関わりたいと願う、主観的な少年の欲望 (B) であり、その両者の切断である。

特に、語り手の語り、完全には少年の視点に同化していない点こそが重要だろう。語り (A) では〈物象〉として切り取られたトロツコがあり、一方の語り (B) では、そのトロツコに関わり、自分の欲望に引き寄せようとする少年の心理が語られる。(A) と (B) は、一文ごとに区切られながら、あるいはダッシュを用いて区別されることで、交わらない。ここに、〈物象〉の表象から恣意的に物語を紡いでゆこうとする少年の主観的世界が

浮かび上がってくるのではないか。それについて片山恒雄は、トロッコの動きや土工の動作が「単なる過去の一回的な事実ではな」く、「何度も繰り返された動きの中から、印象的な動きを抽出して典型化したもの」であり、「文首の額縁部を支配する八歳の子供の時から開放された、超時間的存在として把握されたもの」だと論じる。この指摘を参照すれば、工事現場を眺める良平の視点についての次の一文が、良平の心的世界を語ったものとなるだろう。

良平はそんなけしきを眺めながら、土工になりたいと思つた事がある。

この語りから、良平少年が語り(A)にある、「佇んでゐる土工やトロッコの運動や「細い線路」といつた〈物象〉を、〈けしき〉として切り取っていることが明らかだろう。〈けしき〉とは、いわばトロッコを軸として良平の認識や感性によって再構築された世界、すなわち〈物語〉世界へと接続される言葉である。この再構築された〈けしき〉を前に、「土工になりたい」「せめては一度でも土工と一しよに、トロッコへ乗りたい」「乗れないまでも押す事さへ出来たら」と、良平の欲望〈B〉は前景化されていく。

語り手は、良平においてトロッコとの〈物語〉が始まることを読み手に暗示するものの、〈物象〉としての〈トロッコ〉と〈けしき〉とを語り分けており、良平の認識は絶えず相対化されてい

くことになる。このように、〈物象〉としての〈トロッコ〉について語りながら、少年の物語に解消されないまま並行していくことは留意しておきたい。

## 二 〈薄明りの中〉の一回性

さて、場面は「二月の初旬」の「或夕方」、良平は「二つ下の弟」や、「弟と同じ年の隣の子供」とともにトロッコ置き場に行ってみると、珍しく土工がいない。

トロッコは泥だらけになつた儘、薄明りの中に並んでゐる。が、その外は何處を見ても、土工たちの姿は見えなかつた。

三人の子供は恐る恐る、一番端にあるトロッコをpushした。ト  
ロッコは三人の力が揃ふと、突然「ごろりと車輪をまはした。

良平はこの音にひやりとした。

子ども達はトロッコをpushし、突然「ごろり」と車輪は回る。良平が漠然とした「けしき」として眺めていた静止画面が、突然、運動する「物」のリアリティーに直面し、「ひやり」とする感覚が語られていよう。条件としての「三人の力が揃ふ」という言葉が、このリアリティーを下支えしていることにも注目したい。これに関しては、「弟」たちが「トロッコ」を動かすための〈条件〉そのものであるかのように、発話せず、固有名さえ与えられない点も併せて考えるべきだろう。その語り手の態度には、固有名詞に内在する「個体的人間特性」の読み取りの拒否があると島

田英雄は指摘する。この語りの偏向性は、一層良平とトロッコとの差異を焦点化して読み取らせていく効果があろう。<sup>⑤</sup>

「弟」たちよりも「トロッコ」に視点を集中させる良平の主観と、実際の「トロッコ」の描写とは、いわば温度差とでもいったずれをみせている。少年が初めて憧れの「トロッコ」に乗り込み、滑り出す場面の語りからもそれは窺えよう。

トロッコは最初徐ろに、それから見る見る勢よく、一息に線路を下り出した。その途端につき當りの風景は、忽ち両側へ分かれるやうに、ずんずん目の前へ展開して来る。顔に當る薄暮の風、足の下に躍るトロッコの動揺、——良平は殆有頂天になつた。

しかしトロッコは三分の後、もうもとの終點に止まつてゐた。

この場面を浜本純逸は、「トロッコは擬人化されて表現されて」おり、良平には「トロッコが生き物のように輝いてみえた」のであり、「読者には、生き物であるかのごとく読める」と解釈する。<sup>⑥</sup>確かに良平は、「トロッコ」とのつながりや一体感を感じ取り、「有頂天」になつてゐるが、それはあくまでも束の間の一体感しかない。語り手は「トロッコ」を擬人化して語つてなどおらず、良平少年の一体化したかのような高揚感を改行で分かつてゐる。「しかしトロッコは三分の後、もうもとの終點に止まつてゐた。」と語り、〈物語〉の進行を断つのである。運動の果てに動力が尽

きた〈物象〉の状態を眼前にすることで、読み手は、良平少年が見ようとし、続けようと望む物語に最後まで寄り添えず、むしろその物語の切断の現場に立ち会ふこととなる。

良平の方は、「泥だらけになつた儘、薄明るい中に並んでゐるトロッコをやや擬人化して捉え、彼自身もその「けしき」の中に佇む存在である。そしてトロッコに関わろうと、「さあ、もう一度押すぢやあ。」と押し上げにかかるが、「まだ車輪も動かない内に」、再び〈良平の物語〉は切断される。興味深いのは、今回は人為的な介入が切断をもたらす点である。

「この野郎！誰に断つてトロに觸つた？」

其處には古い印半天に、季節外れの麥藁帽をかぶつた、背の高い土工が佇んでゐる、——さつ云ふ姿が目にはひつた時、良平は年下の二人と一しよに、もう五六間逃げ出してゐた。

——それぎり良平は使の歸りに、人氣のない工事場のトロッコを見て、二度と乗つて見ようと思つた事はない。

ただの恐怖とは異なり、断りもなしに触れたという禁忌を侵した体験が、良平をして「二度と乗つて見よう」と思わせなかつたという。この「薄明りの中」のたつた一度の経験は、瞬間のイメージとして切り取られ、無意識下に潜み、〈現在の良平〉に次のような形で想起されていくこととなる。

唯その時の土工の姿は、今でも良平の頭の何處かに、はつきりした記憶を残してゐる。薄明りの中に仄めいた、小さい黄

い藁藁帽、——しかしその記憶さへも、年毎に色彩は薄れるらしい。

「小さい黄色い藁藁帽」としか認識されない〈土工〉は、〈良平の物語〉を突然断ち切った無名の他者として〈記憶〉に蓄積されている。また、「今でも」「はつきりした記憶を残してゐる」ながら、「年毎に色彩は薄れる」という語りは、具体的な輪郭こそ崩れてゆくものの今も深層意識の「何處かに」イメージとして抜きがたく残っていることを読み取らせていよう。これは、晩年の「蜃気楼」(昭二・三)などにも通底するモチーフといえる。「蜃気楼」では、無意識下に潜む記憶の得体の知れなさや、その記憶が何の前触れもなくイメージとして表出する薄気味悪さ、それにまつわる「僕」の不安が巧みに描かれている。三島由紀夫も「蜃気楼」を「鮮明な物象が提示されて、物象が物象のまま、作者の心の状態の象徴をなし、そこに詩が漂つてゐる」作品と鋭く見抜いていた。<sup>⑥</sup>

回想する〈現在の良平〉もまた、語り手によって再構築された〈語られる存在〉であるため、彼は少年時の体験から何を自分につなげるものとして選び、〈記憶〉として想起するののかについては明確ではない。語り手だけが、その漠としたイメージや記憶の明滅を相対的に語り、回想の中から少年と成年の二人の〈良平〉につながる何ものかを読み手に読み取らせようとしている。

### 三 〈何時までも〉と〈薄ら寒い海〉

その後十日余りたつてから、良平は又たつたひとり、午過ぎの工事場に佇みながら、トロッコの來るのを眺めてゐた。

「年下の二人」さえなく、「たつたひとり」で「佇み」、「トロッコ」が來るのを「眺め」ている少年。その内的世界がさらに深化していくことが暗示される場面だろう。<sup>⑦</sup>それを証明するかのように、良平がこの日に見出したのは、山から下りてきて土を運び上げるいつもの「トロッコ」ではなく、本線になる線路を枕木を積み登ってくる「トロッコ」であり、それに乗る「何だか親しみ易いやうな氣」のする「若い土工」であった。少年は「若い土工」に対して、「この人たちならば叱られない」と、理由なくも断定している。それは、怒鳴られて「トロッコ」と引き離された「十日余り」前の「記憶」とはなぜか切斷されている。

良平の「若い土工」への認識の甘さは、良平の執着があくまで「トロッコ」にあり、「若い土工」そのものにはないことを示している。そもそも良平は、「俯向きにトロッコを押しした儘」の男たちについて、「縞のシャツを着てゐる」ことと「耳に巻煙草を挟んだ」こと以外の特徴を捉えていないうえに、「弟」たち同様に固有な名も与えていない。「縞のシャツ」も「耳に巻煙草」も代替可能であり、二人は少年(および読み手)の記憶にはむしろ残らないものとして語られているのである。

この語りの効果については、『良平』を卓立させ、読者に強く印象付けようと思図した」（島田・前掲論文）、「若い男を外見上の特徴で表しているのは、良平と彼らとの間に精神的なつながりが無かったことを意味している」（岡崎）など多く指摘されている。⑨だが、『良平』を卓立させ、他の登場人物との「精神的なつながり」を語らない語り手の目的は、おそらく、少年の認識を外界から遮断することによってこそ語れる世界があるためではないか。

これまで見てきたように、八歳の少年である良平にとって、「トロッコ」にいかに関わり続けるかが、当面の最重要関心事なのであり、「弟」たちや、「若い二人の土工」は、少年の認識においては「思つた通り快い返事」をするような、自分の〈物語〉を構成する一要素にすぎない。そして語り手は、その純粋な少年の〈物語〉がいかに脆弱で不安定なものであるかを、一方で浮かびあがらせていく機能をもっている。たとえば次の土工との対話は良平の〈内心〉と現実との齟齬を露呈しているだろう。

「もう押さなくとも好い。」——良平は今にも云はれるかと内心がかりでならなかつた。が、若い二人の土工は、前よりも腰を起したぎり、黙黙と車を押し續けてゐた。良平はとうとうこらへ切れずに、怯つ怯つこんな事を尋ねて見た。

「何時までも押ししてゐて好い？」  
「好いとも。」

二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ」と思つた。

かつて怒鳴られてトロッコと引き離れた体験から、ここで良平は「こらへ切れず」、「何時までも押ししてゐて好い？」という無期限の約束を土工に持ちかけている。この「何時までも」とははたして「何時まで」のことなのか。すでに少年の主観的世界は綻び始めていよう。この問いが現実では不可能であることに少年は無自覚だが、〈語り手〉だけは良平の問いかけを「こんな事」と表現し、暗に相対化していることは看過できない。

さらに語り手は、「黙黙と車を押し続け」、「同時に返事をする」という土工の無個性を語ることで、彼らの根本的なところでの無関係を読み取らせていく。その一方で、「何時までも」という無期限の約束をあっさり交わす人間を、「優しい人たち」と都合よく受け取る良平のひとり合点や、認識の甘さもその読みの中で浮かび上がらせていくのである。

良平は本来なら苦しいはずの「蜜柑畑」の急勾配さえも、「登り路の方が好い、何時までも押させてくれるから」と肯定的に捉えていく。繰り返されるこの「何時までも」という言葉は、良平をめぐる語りにおいて重要なキーワードだろう。「何時までも」トロッコに関わり続け、進み続けることだけを一心に願っており、その認識に疑いをはさむことさえない。

一方、その間にも語り手は、「急勾配になった」「急に線路は下





測は揺るぎない少年の確信として読み手に印象づけられていく。そして、この語り手によるいささか断定的な語り、次の場面の大きな布石となっていくのである。

#### 四 〈たつた一人〉というこの不安

作品内の時間は瞬く間に過ぎ、ついに日が暮れ始める。もはや良平は、「車に手をかけてゐても、心は外の事を考へてゐた」。そして「西日の光が消えかかつてゐる」のを見た少年の切迫感を、語り手はたくみに捉えていく。

「もう日が暮れる。」——彼はさう考へると、ほんやり腰かけてもゐられなかつた。トロッコの車輪を蹴て見たり、一人では動かないのを承知しながらうんうんそれを押して見たり、——そんな事に氣もちを紛らせてゐた。

〈歸る〉ことばかり氣にしている良平は、「行く所まで行きつかなければ、トロッコも彼等も歸れない」という、「わかり切つてゐた」結論にも苛立っている。トロッコはいまや、〈歸る〉上の絶対的な手段にもなつてゐた。動かないとわかつていながら動かしてみようとすると「氣もちの紛らせ」方は、トロッコを頼みにする少年の寄る辺なさを語つていよう。

しかし、良平の帰りたいという思いに寄り添うかにもえた語り手は、次の段落で突然、〈少年の物語〉を崩壊させる。

所が土工たちは出て來ると、車の上の枕木に手をかけなが

ら、無造作に彼にかう云つた。

「われはもう歸んな。おれたちは今日は向う泊りだに。」

「あんまり歸りが遅くなると、われの家でも心配するぞら。」

ともに行つて帰ると信じていた良平にとってあまりに唐突な別れの切り出しである。これを〈初めての他者経験〉と解釈したのは田近純一（前掲論文）だが、一方で土工たちの人格に踏み込んだ説も散見され、「若さ故の無自覚・無分別と読むのが自然」（平岡・前掲論文）などと読まれてきた。しかし、一連の「土工II他者」とのコミュニケーション不通過が今一つ認めたいのは、良平が土工に食い下がったり、あるいは恨みに思うといった心情が一切語られていない点にある。トロッコを押す道中における語り手は、良平に批判的な発言をさせるほど、土工たちの内面を語つてきておらず、両者のコミュニケーションを展開する意図などなかったといえるからだ。語られているのは他者との関係ではなく、自分の置かれた状況を忽然と悟る良平の〈孤立〉した姿である。だからこそ、次のような心的状況に特化した語りを展開するのである。

良平は一瞬間呆氣にとられた。もう彼は暗くなる事、去年の暮母と岩村まで來たが、今日の途はその三四倍ある事、それを今からたつた一人、歩いて歸らなければならぬ事、——さう云ふ事が一時にわかつたのである。良平は殆ど泣きさうになつた。が、泣いても仕方がないと思つた。泣いてゐる場

合ではないとも思つた。彼は若い二人の土工に、取つて附けたやうな御時宜をすると、どんと線路傳ひに走り出した。

(注：原文の脱字について、以下の引用はへわかつた)と記す。)

語り手は、先の「薄ら寒い海」が開けたと同様、この場面でも良平が「一時にわかつた」という。ここで語られているのは、へ一時にわかつた少年の認識の果ての状態である。すなわち、トロッコが動き、押し続けられ行き着き、いずれ帰れるという認識——〈物語〉を「無造作に」切斷され、呆然として孤立せざるを得ない少年の状態そのものである。語りが読者に提示するのは、少年が「たつた一人」、何もわからない闇の中に立たされた瞬間、その状態なのである。

帰趨の明白だったはずの認識が、根底から崩れ去つた後、「彼は暗くなる」中で、「今からたつた一人」になる。「泣いても仕方がない」「泣いてゐる場合ではない」という言葉には、〈泣くこともできない〉ほどの少年の戦慄が内在する。ゆえに良平は無我夢中に線路の側を走り続けるのであり、その少年の恐怖と焦燥感に読み手は寄り添っていくことになる。

良平は少時無我夢中に、線路の側を走り續けた。その内に懐の菓子包みが、邪魔になる事に気がついたから、それを路側へ抛り出す次に、板草履も其處へ脱ぎ捨ててしまつた。

(中略)

竹藪の側を駆け抜けると、夕焼けのした日金山の空も、もう

火照りが消えかかつてゐた。良平は愈氣が氣でなかつた。往きと還りと變るせるか、景色の違ふのも不安だつた。すると今度は着物までも、汗の濡れ通つたのが氣になつたから、やはり必死に駆け續けたなり、羽織を路側へ脱いで捨てた。

線路をひた走りながら、土工たちから受け取つた「菓子包み」を捨てることで、もともと希薄であつた彼らとの關係性を無に歸し、続いて「板草履」も脱ぎ、「羽織」までも道端へ脱ぎ捨てて良平は走る。「往きと還りと變るせるか、景色の違ふのも不安だつた」と、またも〈景色〉を見る少年の心情が語られているが、これは視角の異なる復路ゆえの錯覚だけを語っているのではなからう。良平の見る「景色が違ふ」のは、これまで既定の前提と思ひ込んでいた〈還るための復路〉が失われ、「たつた一人」で新たに行く道の「景色」として認識されたためであろう。〈往き〉でも〈還り〉でもなく、不確かな一本路の途上を良平は駆けており、その心象に湧き上がる〈不安〉は、必死に涙をこらえて駆け続ける行為と併せて語られることでより深く読みとられていく。その少年が抱く〈不安〉は、わずかな日の光も沈もうとする夕闇の語りにおいて、更に踏み込むかたちでその内実が明らかにされる。

密柑畑へ来る頃には、あたりは暗くなる一方だつた。「命さへ助かれば。」——良平はさう思ひながら、這つてもつまつても走つて行つた。

外灯などない明治期の田舎の線路が眞の暗闇に近づいていく中で、語り手はあえて「命」という言葉を良平の心情から捉えている。この心情描写を西原千博は、「不自然」だとし、少年の不安は「かなり漠然」としたものと評する。だが、〈還り〉を前提とした良平の認識が、土工の言葉により根底から崩壊したのである。〈帰れないかもしれない〉こと、それはすなわち良平が疑いも持たなかった「何時までも」あるはずの自分への揺らぎ、すなわち存在の不確実性への突然の覚醒であつたらう。「一時にわかつた」という言葉でその覚醒を表現しており、この覚醒から戦慄への深化が「命さへ助かれば」との考えを生じさせたのではないか。ならば良平のこの心情は切実であり、決して「不自然」なものではない。

無論、これまで良平の物語を読み進めてきた読み手、たとえば雑誌「大観」を中心とする読者をはじめとする大人の多くは、この「命さへ助かれば」という語りを、子どもならではの大きな感情の表出として読みとるかもしれない。同時に、そうした読みは、おそらく作者の意図するところでもあろう。暗闇で「たった一人」となった少年が痛切に願つた祈りは、いずれ作品末尾の重要な読みに重なり、読み手に返されていくこととなる。

さて、作品に戻ると、泣くこともできずに「無我夢中」で走り続けた良平は、ようやく村へたどり着くが、村に入っても緊張はほどけず、走り続けていく。

井戸端に水を汲んでゐる女衆や、畑から歸つて来る男衆は、良平が喘ぎ喘ぎ走るのを見ては、「おいどうしたね？」などと聲をかけた。が、彼は無言の儘、雑貨屋だの床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。

良平は村人の問いかけに「無言の儘」であり、ここでも他者とのコミュニケーションは断たれている。語り手は問いかける「女衆」や「男衆」、そして「雑貨屋だの床屋だの」、「走り過ぎた」家々を「明るの家」とのみ表現することで、あたかも少年の目端で影絵のごとく流れ去る「けしき」として語っていく。

そして、ついに良平は家の門口に駆け込み、家内の者は少年を囲み大騒ぎとなる。

彼の家の門口へ駆けこんだ時、良平はたうとう大聲に、わつと泣き出さずにはゐられなかつた。その泣き聲は彼の周囲へ、一時に父や母を集まらせた。殊に母は何とか云ひながら、良平の體を抱へるやうにした。が、良平は手足をもがきながら、噁り上げ噁り上げ泣き續けた。その聲が余り烈しかったせいから、近所の女衆も三四人、薄暗い門口へ集つて来た。父母は勿論その人たちは、口々に彼の泣く譯を尋ねた。しかし彼は何と云はれても、泣き立てるより外に仕方がなかつた。あの遠い路を駈け通して来た、今までの心細さをふり返ると、いくら大聲に泣き續けても、泣き足りない氣もちに迫られながら、……………

良平について、語り手は単に「泣き出した」という行為に止めず、「泣き出さずにはゐられなかつた」と心情をさらに深く突き詰めて表現しようとする。⑤にも関わらず、その理由である「泣く譯」、すなわち根源的な生の「心細さ」について、良平は言語化できず、語り手もまた「何と云はれても泣き立てるより外に仕方がなかつた」とのみ語るほかない。両者が言語化を断念し、家族も理解できないこの「心細さ」は、そのまま読み手に根源的なイメージとして委ねられていくこととなる。

その意味で特に注目したいのが、「母」との関係である。「母」は「何とか云ひながら」、良平の体を抱こうとするが、良平はその腕の中に飛びこみながらも、「手足をものがきながら」泣き続ける。「母」の言葉は良平に届いておらず、良平の心中も「母」には受けとめられない。良平が受け取った戦慄や不安、そして「心細さ」は、もはや「母」の身体によっても癒されるものではない。この両者のディスコミュニケーションは、より多く語り手に寄り添ってきた読み手だけが受け取ることができるのである。そして、緊密だったはずの母子の関係性の揺らぎが語られることで、「泣き立てるより外に仕方がなかつた」という言語化されない根源的な心象の方へと、読み手は導かれていくのである。

「あの遠い路を駆け通して来た、今までの心細さ」とは、すなわち、「たつた一人で」、しかも自分の予定調和的な認識を大きく裏切つて、〈帰れないかもしれない〉不安を抱き、路を走り続け

た経験をさしている。ならば、その経験を通し、良平は「母」の腕ではもはや安堵できない、不確かな「たつた一人」の存在でしかない自分を、痛切に感得したのではないか。

母と子の一体化を語るかにみえて、実は語り手はその〈切断〉をこそ語っているのであり、語り手に寄り添い続けた読み手だけが、その〈切断〉のイメージを少年の孤立した存在イメージとして読み取る。だからこそ、作品末尾の数行の語りが深い意味を持つといえよう。

### 終りに 〈斷續〉する世界の途上にあるもの

段落とともに時代が変わり、すでに妻子持ちとなって東京の雑誌社で働く「今」の良平が登場し、次のように語られていく。

良平は二十六の年、妻子と一しよに東京へ出て来た。今では或雑誌社の二階に、校正の朱筆を握つてゐる。が、彼はどうかすると、全然何の理由もないのに、その時の彼を思ひ出す事がある。全然何の理由もないのに？——塵勞に疲れた彼の前には今でもやはりその時のやうに、薄暗い藪や坂のある路が、細細と一すじ斷續してゐる。……………

すでに大人になった「今」の良平は、「妻子」がいる家庭や勤務先の「或雑誌社の二階」といった〈社会〉に囲い込まれる一生活者である。ここで語り手がこだわるのが、「今」の良平が少年だった「その時の彼」を、「全然何の理由もないのに」思い出す

ことについてである。特に興味深いのは、いったんは「理由もない」と語りながらすぐさま「全然何の理由もないのに？」と、自らの語りを反語的に問い直し、言語化されない「理由」を読み手にはのめかそうとする点である。すなわち、ここから読み取られるのは、無意識に潜在する〈理由〉によって、現在の社会的な領域からふと逸脱し、少年の日に体験された世界に接続されてしまう良平の〈意識〉であろう。

「塵労」に疲れた「今」の良平と、何も労苦を知らなかった良平少年との世界を接続させるものは何か。たとえば塵労とは、芥川作品に幾度も登場しているキーワードであろう。掌編『塵労』（大九・八）は、多忙な出版社の男が、「旅行らしい旅行はした事がない」にも関わらず「大規模な旅行案内」を作成する計画を得意げに話すアイロニカルな作品であり、『澄江堂雑記』（塵労）（大十三・三）では、「清閑」には乏しい「匆忙たる暮し」について語られている。また、『蜜柑』（大八・五）の視点人物は、「塵労」に疲れた「僕」であった。いずれも具体的な悲劇や人生への挫折や絶望ではなく、まさに「塵」のごとく日々生活を積み重ねていくうえで感じる、〈生きていることそのものへの疲弊〉を表現している。そのイメージは「細細と一すじ」かろうじて続く「路」の「薄暗さ」につながってまいいか。

したがって、「塵労に疲れた」良平が、遠い「思ひ出」として普段は思い出すこともない体験を思い出す「理由」とは、生きる

ことを積み重ねながらも、「命さへ助かれば」との思いで「たった一人」「路」を駆け通したあの切実で実存的な体験の上に〈今も在るのだ〉という潜在的記憶が、時に湧出してくるためではないか。

ふだんは意識の上で断たれつつも、無意識下でなおも続いており、時に湧出するこの実存的なイメージは、連続ならぬ「断続」という言葉で明らかにされていよう。「断続してゐる」「路」とは、少年の良平が、〈物語〉を切断され、逃げるように駆け続けた「薄暗い藪や坂のある路」、すなわち〈往き〉でも〈還り〉でもない、可能性の連続ではない一本道であり、存在がいつ失われるかわからない不安を抱えながら駆け通しに駆け続けなければならぬ「路」のことであろう。

『トロッコ』の語り手は、いつ切れるともわからない「断続」した世界に佇み、その世界を垣間見る〈良平の視点〉を通し、その存在を浮き彫りにした。ここに至り、少年時も成年時をも貫通する〈良平〉の眼差しは「大観」の読者を含むすべての人間に開かれる。『トロッコ』の世界は、単に良平少年の思い出や彼の人生の内だけで完結しているわけではない。それは、今も「断続」する「路」の途上にある人間すべてが、「全然何の理由もなく」自らの足元の覚束ない不確かさに突然、気づかされる瞬間があることを物語っている。言葉に語りつくせぬその足元の不安感に気づいていたのは、作中の良平よりもむしろ語り手であった。冒頭

にみたように、従来の『トロッコ』論の多くは作中人物の良平とその視点に立つ心象の意味づけに傾斜しがちであった。本論では、良平の視点とは異なる〈語り手〉の視点に注目すること、  
『トロッコ』が良平少年一個の人生に留まらず「断續してゐる世界に佇む人間すべてを襲う〈存在の揺らぎ〉を描いたものではないかと考えた。

注

- ① 瀧井孝作「純潔」藪の中」をめぐりて——(昭和二六・一「改造」)
- ② 田近洵「芥川龍之介「トロッコ」(昭和五〇・十「言語行動主体の形成——国語教育への視座」)新光閣書店) 近年では武藤清吾による〈不可解な他者の存在〉の発見による〈了解されない自己〉の外界〉の不確かさと、他者への〈了解〉の自己崩壊といった説など、深まりをみせている。武藤清吾「芥川龍之介の童話」(平二六・二 翰林書房)
- ③ 高橋龍夫「トロッコ」の方法 回想形式における構造的表象(平一九・三「芥川龍之介研究年誌」(一の会) 一卷)
- ④ 岡崎晃一「文学教材「トロッコ」の研究—改行による新段落の設定—」(昭和五二・二「解釈」二二巻一号)
- ⑤ F・シュタンツェル『物語の構造〈語り〉の理論とテキスト分析』(平元・一 岩波書店)  
ジェラルド・ジュネット『物語のディスクリブル 方法論の試み』(昭六〇・九 星雲社)
- ⑥ 芥川の生前に既に企画されていた童話集『三つの宝』には「ト

- ⑦ ロッコ』は含まれていない。
- ⑧ 平岡敏夫「トロッコ」(昭五七・十一「芥川龍之介」所収 大修館書店)
- ⑨ 下沢勝井「トロッコ」(昭和四四・五「芥川龍之介作品研究」近代文学研究双書) 八木書店)
- ⑩ 本文は、かつて教科書採択時の作品末尾改変において、島田勇雄や岡崎晃一など「解釈」学会を中心に、特に国語教育の分野で様々な意義深い問題が多く追求された点を重んじ、初出「大観」から引く。
- ⑪ 浅井清「トロッコ 芥川文学の作品構造」(昭四五・一「國文學」第十五巻第十五号 学燈社)
- ⑫ トロッコの歴史的背景や事実と作品の相違点については、以下の論文に詳しい。
- ⑬ 沢和哉「日本の鉄道」100年の話」(昭四七)
- ⑭ 安藤公美「湯河原—保養の地、そして「トロッコ」の舞台—」(平一三・一「解釈と鑑賞」別冊)
- ⑮ 石上敏「芥川龍之介「トロッコ」に関する一つの事実—軽便鉄道敷設工事の描写をめぐって—」(平一六・九「解釈」四〇巻九号)
- ⑯ 三島由紀夫「手巾」「南京の基督」ほか」(昭和三一・九 角川文庫解説)
- ⑰ ここにいう〈物象〉とは、一切の意味づけ(本稿でいう「物語」もこの延長にある)を拒否する物的現象、サルトル「嘔吐」でロカンタンも直面した「物そのもの」を示す。
- ⑱ 片村恒雄「文学教材の表現(四)——「トロッコ」の現在形止め——」(昭五五・四「解釈」二六巻四号)

- ⑮ 島田勇雄「人称表現の修辭論的分析——「トロッコ」について——」(昭五四・七「解釈」二五卷七号)
- ⑯ 浜本純逸『「トロッコ」の表現——良平の心の光と闇——』(平四・二「実践国語研究」十六卷一号)
- ⑰ 三島由紀夫『南京の基督』解説一(昭三二・九)、『南京の基督』他七編(角川書店)
- ⑱ その構成は、先述の『蜃気楼』(昭二・三)における昼から夜への場面転換に通じる。
- ⑲ 岡崎晃一「「トロッコ」の補助符号」(昭六一・六「解釈」三三二卷六号)
- ⑳ 西原千博『「トロッコ」論ノオト』(平元・三)「国語国文学科 研究論文集」三五号 北海道教育大学札幌分校国語国文学科)
- ㉑ 「泣いた」ではなく「泣き出さずにはゐられなかつた」や、「泣き立てた」ではなく、「泣き立てるより外に仕方がなかつた」などの例でわかるように、事象そのものを語る前者のような表現ではなく、同じ事象についてより深く心情をつきつめた表現に語り手の思いが込められている。語られたことと語ったことの違いがこの用例でもわかる。

池上 貴子(いけがみ たかこ) 卒業生